

シグナルとしての財政政策

小西秀樹

早稲田大学政治経済学術院

2012 年 1 月 18 日

- ① 同じ政党あるいは政治家が政権の座を維持していたとしても、選挙の前と後で政策の内容ががらりと変わることがある。とくに、選挙のある年の予算と、選挙が終わった年の予算で変動が生じる現象がよく指摘される。これを政治的予算循環という。
- ② たとえば、選挙前には、景気を浮揚をねらった減税など、拡張的な予算政策がとられ、選挙後には財再赤字を減らすための増税など、緊縮的な予算政策がとられるといった循環である。
- ③ 政治的な予算循環がとられる理由としては、有権者が近視眼的であり、選挙後に増税が実施されることを考えないで投票するからだと考えられてきた。
- ④ ただし、逆の考え方もあって、むしろ有権者は財政赤字を減らす政府を再選しやすいという節もある。
- ⑤ いずれにせよ、有権者が合理的なら、政治的予算循環は起きないのだろうか？ 予算政策を政党あるいは政治家が有権者に送るシグナルと考えたとき、有権者が合理的でも、政治的な予算循環が起きるのではないだろうか。
- ⑥ そうする場合、シグナルとしての財政政策はどのような意味を持つのか。

次のようなシグナリング・モデルを使って、歳出削減額の政治的循環について分析しよう。

- ① 政治家には、現職、挑戦者にかかわらず、2つのタイプ H と L がある。 H は利益集団と癒着しやすいタイプ、 L は癒着しにくいタイプである。
- ② 有権者は外見からは政治家がどちらのタイプかを識別できない。何の情報もないとき、政治家がタイプ L である確率を p とする ($0 < p < 1$)。
- ③ タイプ t の政治家が1期間政権をとったときの利得は $R - m \times c_t$ で表される (単位は億円)。 $R > 0$ は支配者レント、 m はそのときの歳出削減額で、 0 か $\hat{m}$ のどちらかが選ばれる ($\hat{m} > 0$)。
- ④ c_t はタイプ t の政治家が1億円の歳出削減を実行したときに被る政治的費用である。政治的費用は $c_H > c_L > 0$ を満たす。利益集団寄りの政治家ほど歳出削減で失うものは大きい。
- ⑤ タイプ t の政治家が政権をとった期間に有権者の得る利得を V_t とする。 $V_L > V_H$ が成り立つ。

ゲームは次のようなタイミングで進行する.

- ① Nature が第 1 期の現職のタイプ $t \in \{H, L\}$ をランダムに選ぶ.
- ② 自分のタイプを知る現職が, 第 1 期の歳出削減 $m \in \{\hat{m}, 0\}$ を選択する.
- ③ 選挙が始まる. Nature が挑戦者のタイプ $t \in \{H, L\}$ をランダムに選ぶ.
- ④ 有権者が第 1 期の歳出削減額を観察した後, 現職を支持する (Y) か, しない (N) かを決める. 支持されれば第 2 期も政権をとる. 有権者がどちらでも無差別なときは, 確率 0.5 で現職が再選される.
- ⑤ 第 2 期の政権をとった政治家が, 第 2 期の歳出削減額を実施する.

注意

- 第 2 期には選挙はないので, 均衡ではどちらのタイプの政治家も $m = 0$ を選ぶはずである.
- したがって, 政治家が選挙に勝ったときの利得は R (これを第 1 期の価値に換算するには, 割引因子 δ ($0 < \delta < 1$) を適用する).

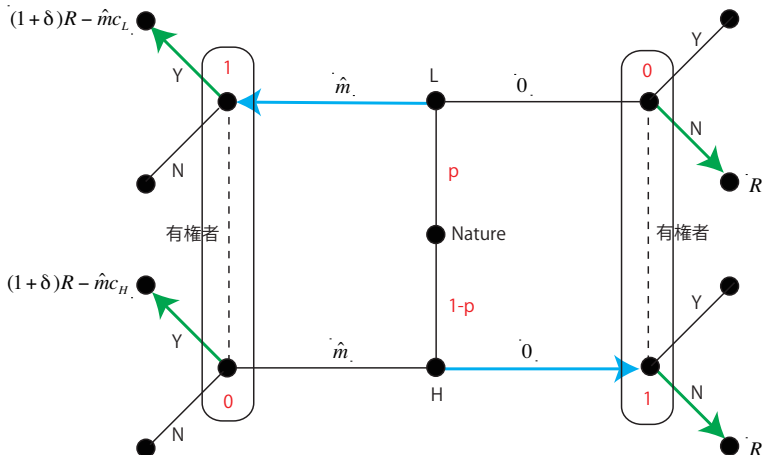
- ① タイプ H の現職は $m = 0$, タイプ L の現職は $m = \hat{m}$ を選ぶような分離均衡を探そう.
- ② 有権者は歳出削減の情報を利用して, 現職のタイプを推測する.
 - 歳出を m だけ削減した現職がタイプ L である確率を $\mu(m)$ と書く.
 - 整合的な予想形成は, $\mu(\hat{m}) = 1, \mu(0) = 0$.
- ③ 第 1 期の歳出削減額 m を観察した有権者の行動を, 現職の再選確率 $a(m)$ によって表す.
 - 有権者はタイプ L である確率の高い政治家に第 2 期の政権を委ねたい.
 - 有権者の逐次合理的な行動は, $a(\hat{m}) = 1, a(0) = 0$.
- ④ タイプ t の現職が第 1 期に歳出削減 $m \in \{\hat{m}, 0\}$ を実行したときに得る, 2 期間を通じた利得は $R - mc_t + a(m)\delta R$.
- ⑤ 上記のような分離均衡が存在するために $\hat{m}$ の満たすべき条件は何か?

- ① 両タイプが $\hat{m}$ だけ歳出削減を行う一括均衡を探そう.
- ② 整合的な予想形成は $\mu(\hat{m}) = p$ であり, $\hat{m}$ を観察した有権者は現職でも挑戦者でも無差別. ゆえに, $a(\hat{m}) = 0.5$.
- ③ $m = 0$ は均衡ではとられないので, $\mu(0)$ は自由. 現職に歳出削減を行う最大の誘因を持たせるには, 歳出を削減しなかったら落選する, つまり $a(0) = 0$ である必要がある. そこで, $\mu(0) = 0$ とする.
- ④ タイプ t の現職が第 1 期に歳出削減 $m \in \{\hat{m}, 0\}$ を実行したときに得る, 2 期間を通じた利得は $R - mc_t + a(m)\delta R$.
- ⑤ 上記のような一括均衡が存在するために $\hat{m}$ が満たすべき条件は何か?

分離均衡が存在するための条件

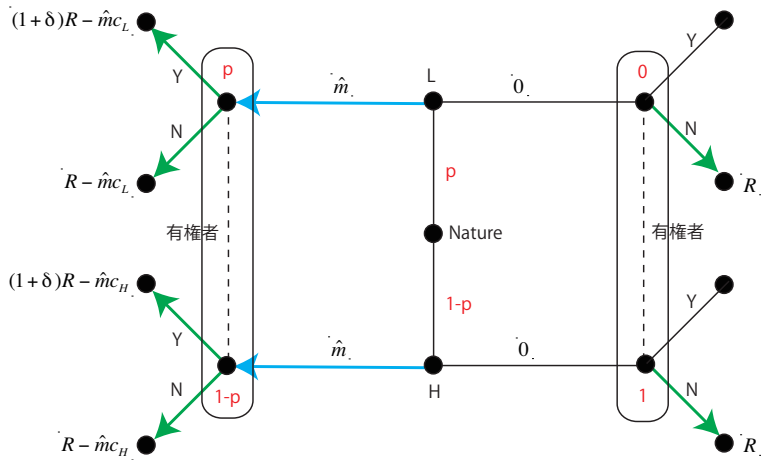
誘因整合性条件： $(1 + \delta)R - \hat{m}c_L \geq R \geq (1 + \delta)R - \hat{m}c_H$

すなわち $\delta R/c_H \leq \hat{m} \leq \delta R/c_L$



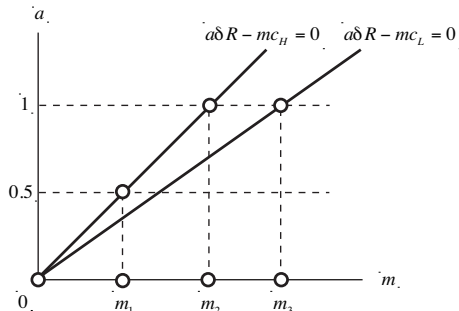
一括均衡の誘因整合性条件と図解

- **タイプ L** : $R - c_L \hat{m} + 0.5\delta R \geq R$, **タイプ H** : $R - c_H \hat{m} + 0.5\delta R \geq R$
- 一括均衡の存在を保証する $\hat{m}$ の範囲は, $\hat{m} \leq 0.5\delta R / c_H$.



均衡で実現しうる歳出削減の範囲

- 分離均衡： $m_2 \leq \hat{m} \leq m_3$
- 一括均衡： $0 < \hat{m} \leq m_1$



- ① 有権者が合理的でも、政治家が私的情報を伝達するために、予算政策をシグナルとして使う可能性がある

- ② 予算シグナルは有権者に、政治家を見分けられるようにする「選抜」のメリット、政治家に財政再建に向かわせる「動機づけ」のメリットをもたらす可能性がある
- ③ 分離均衡は、選抜のメリットをもたらすが、タイプLにしか歳出削減をしようと動機づけない。ただし、そのときの歳出削減の規模は大きい。
- ④ 一括均衡は、選抜のメリットをもたらさないが、両方のタイプに小規模の歳出削減を行うよう動機づける。
- ⑤ 分離均衡の歳出削減は過大かもしれないし、一括均衡の歳出削減は過少かもしれない。